

氏 名 佐貫 正和

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1398 号

学位授与の日付 平成 23 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 近代日本における共和主義－丘浅次郎の思想とネットワークを通じて－

論文審査委員 主 査 准教授 樋口 雄彦
教授 安田 常雄
教授 久留島 浩
教授 福井 直秀 京都外国語大学
非常勤講師 佐藤 能丸 早稲田大学

論文内容の要旨

近代日本には、共和主義と共和主義の形成と展開を支えた基盤は果たして存在したのだろうか。この問いを念頭におきながら、本稿は、丘浅次郎(1868年～1944年。自然史学者)の思想と丘が参加したネットワークを考察して、丘の共和主義がもつ思想的特徴と、丘の共和主義の形成と展開を支えた基盤がもつ多元的構造を明らかにすることを目的とする。

近代日本の共和主義研究史では、自由民権期の共和主義に関して否定的見解が多く、共和主義と共和主義を支えた基盤を検討した研究や、1889年～1945年の共和主義を検討した研究は殆ど無い。そこで本稿は、1920年代前後に公表された丘の共和主義を実証した上で、そこから一步ふみこんで、丘の共和主義の形成と展開を支えた基盤がもつ多元的構造を考察して、共和主義を思想家の言説を分析するレベルだけに止まらせるのではなく、思想家が参加したネットワークの活動と交友の営為というより根源的な社会的経験のレベルから明らかにしたい。

共和主義研究史の問題点として、自由民権家を対象にして天皇制か共和制かをめぐる政治思想の共和主義に主眼をおく戦後歴史学と、近世日本の小さな「共和国」とそれを支える階級の枠を越える共和的な人間関係に主眼をおく思想史は断絶してきた。そこで本稿は、先ず丘が参加したネットワークを検討して、政治思想の共和主義と共和的な人間関係を明らかにして、次に丘の言論活動を検討して、政治思想の共和主義を明らかにして、最後にネットワークと丘の共和主義の繋がりを明らかにする。本稿が、丘の共和主義と共和主義の形成と展開を支えた基盤を明らかにできたならば、家永三郎が言う「共和主義の伝統」が沈滞した中間期(1889年～1945年)にも、共和主義と「共和主義の形成を培う土壌としての役割」をもつ「共和主義意識」が存在した一例を実証的に明らかにすると同時に、断絶してきた両研究の対話を試みる共和主義研究史上の意義がある。

丘の研究史では、1900年代の丘の進化論は多様な観点から批評されたが、1910年代～1920年代の言論活動や、丘が参加したネットワークや、丘の共和主義とそれを支えた基盤などを検討した研究は少ない。そこで本稿は、丘の言論活動を考察して、共和主義の存在が否定された1920年代前後に公表された丘の共和主義がもつ思想的特徴を明らかにする。更に本稿は、一方では丘の思想構造に即して、「自然における人類の位置」から出発する思考、自然史という枠組み、「苔虫の見地」という博物的な世界観、「不遇の楽しみ」という人生観などを考察して、他方では丘が参加したネットワークに即して、共和主義と共和的な人間関係を考察することによって、丘の共和主義の形成と展開を支えた基盤がもつ多元的構造を明らかにする。

近代日本に共和主義が存在したのか否かも、近代日本の共和主義がいかなる思想的特徴をもったのかも不明のままである今現在、丘の思想とネットワークに即して共和主義と共和主義の形成と展開を支えた基盤を考えることは、いかなる研究意義があるのだろうか。丘の思想の研究には、階級制度や君主制を支える心理的基盤とは一体何かという問題や、世襲の君主制と人間の平等にはいかなる関係や矛盾があるのかという問題や、主権在君を批判して主権在民を求める思想がもつ可能性とは一体何かという問題などを問いなおす共和主義という観点から、近代日本の民主主義思想の意義と問題点と課題を考える意義がある。丘が参加したネットワークの研究には、共和主義を思想家の言説を分析するレベルだけに止まらせるのではなく、共和主義を論じた思想家が参加したネットワークの活動と交友の営為という社会的経験や人間関係のレベルから共和主義の形成

と展開を支えた基盤を明らかにする意義がある。本稿は、丘の思想構造と丘が参加したネットワークの営為という両面を考察して、丘の共和主義がもつ思想的意義と、丘の共和主義の形成と展開を支えた基盤がもつ多元的構造を考えてみたい。

「第1章 坪内逍遙のネットワーク」では、丘が坪内と共同生活した1882年～1887年に焦点をあてて、共同生活の場所で坪内が周辺の人々の協力を得ながら創作を交えて翻訳・翻案した『自由太刀余波鋭鋒』を考察して、坪内のネットワークを再構成する。共同生活の人間関係と、『自由太刀余波鋭鋒』が提示した天賦人權論の系譜に連なる共和主義や、共和主義の展開と腐敗をめぐる課題を検討して、坪内と周辺の人々が共和主義をいかに把握したのか明らかにする。

「第2章 人類学会のネットワーク」では、1884年～1910年代前半の人類学会の活動と交友に焦点をあてて、丘が自然史という枠組みを形成する過程、初期メンバーの共通点、人類学会で共有された平等主義などを考察して、丘の思想が生まれ育った人類学会のネットワークを再構成する。丘の言論活動のポイントとなる、自然史という枠組み、「不遇の楽しみ」という人生観、肩書に基づく人間関係を否定する平等主義などが、どのように生まれ育ったのか明らかにする。

「第3章 博物学会のネットワーク」では、1900年代～1930年代前半に丘が参加した高師博物学会とその周辺の博物学会の活動と交友を考察して、博物をめぐる諸問題を探究した博物学会のネットワークの多様な姿を再構成する。博物学会が探究した博物学の基盤を博物趣味に求める見方、独立自尊の精神を養成する博物学論、博物教育とその広がりなどを検討して、丘の自由教育論、博物的な世界観、博物的な世界主義がどのように形成されたのか明らかにする。

「第4章『進化論講話』における変化の構造」では、『進化論講話』の特徴、読者の批評、各版の変化などを考察して、丘の進化論と「迷信＝天皇制」の向き合い方が変化する構造を明らかにする。1904年版では人々の思考の変革をめざして「迷信」を打破する第1の要素、「迷信」を戦争に役だてて生存競争論で帝国主義を擁護する第2の要素、進化論と「迷信」を調和させる第3の要素が混在したことと、1914年版では各要素が変化して丘思想の方向性が定まったことを明らかにする。「自然における人類の位置」から出発する思考と「苔虫的見地」という博物的な世界観も検討する。

「第5章 1910年代における天皇制批判」では、1910年代に確立したレトリックという方法を駆使した天皇制という言葉を使わない天皇制批判の特徴と、天皇制批判の論拠となる「自然の復讐」論がもつ思想的意味を明らかにして、「触らぬ神の祟り」を天皇制論として位置づける。

「第6章 丘浅次郎の共和主義」では、「新人と旧人」や「猿の群れから共和国」を対象にして、奴隷の対極には共和があると捉える観点を核として、レトリック論と奴隷根性論を組み合わせて分析した天皇制、天賦人權論や民定憲法論の系譜に連なる共和主義、共和国の出現後の課題などを検討して、丘の共和主義がもつ思想的特徴を明らかにする。更に、アジア・太平洋戦争下に博物学会のネットワークが植民地や大東亜共栄圏に拡大する過程で発表された丘の「不遇の楽しみ」という人生観を検討して、共和主義を含む言論活動を支えた基盤を明らかにする。

「終章 丘浅次郎の共和主義の位置づけ」では、丘が参加したネットワークと丘の思想の繋がりを検討して、丘の共和主義の形成と展開を支えた基盤を明らかにする。更に、吉野作造の民本主義や他の共和主義と丘を比較検討して、丘の共和主義を近代日本思想史に位置づける。

博士論文の審査結果の要旨

本論文は、生物学者である丘浅次郎（1868～1944）の学問と思想を全生涯に渉って検討し、その全体像の究明に意欲的に取り組んだ研究である。特に旧来の丘研究が圧倒的に『進化論講話』を中心になされている現状のなかで、進化論研究をも含め、丘の中に存在した「共和主義」思想とその「基盤」となった「共和主義」的意識を思想史的に分析した研究である。

I 本論文の独自性

本論文の独自性の第一は、戦前以来の『進化論講話』を中心とした丘研究に対し、丘の多元的な思想の一面だけを抽出して評価してきたことを批判し、『進化論講話』の1904年版、1910年版、1920版の克明な文献的比較を行い、そこに見られる記述の削除、加筆、強調点の変化などを通して、丘の「共和主義」思想の変化・形成を跡づけた点である。具体的には1904年段階に存在した、①進化論を通じた思考の変革、②「戦争必然論」を正当化する生存競争論、③「迷信」と進化論の調和という三つの要素が、1920年版になると②③の要素が削除ないし消滅し、①の要素が深化した。それは社会ダーウィニズム、優生学や戦争必然論の衰弱と「迷信」批判を通じた「天皇制」批判（共和主義）の強化を意味した。その契機の一つには1910年代における宮内省からの言論自粛の警告が存在していた。この分析を中心とした第4章『『進化論講話』における変化の構造』はきわめて説得的であり、丘浅次郎研究についての新しい問題提起になっている。これは日本の「共和主義」研究の先駆である、家永三郎「日本における共和主義の伝統」（『思想』1958年8月号）によって提起された、日本における「共和主義空白説」（1910～1945年）への批判も意味している。

独自性の第二は、丘の「共和主義」を思想内在的な論理的体系性というよりも、その思想が生成される基盤に注目した点である。具体的には、明治中期における坪内逍遙を中心とした博物学者の共同生活、坪井正五郎らとの初期人類学会、また1900～1930年代にわたる東京高等師範学校の博物学会や地域における多様な博物学会がネットワークという視角から論じられている。特に明治期には、それは肩書きに関係ない対等な関係、自然科学、人文科学、演劇、教育、音楽も含んだサロンであり、「江戸戯作者風」の気分が流れ、アマチュアの力が強調され、神社合併反対運動のネットワークともつながっていた。それが丘の共和主義の基盤となったと分析されている。こうした方法は現在の思想史研究では必ずしも一般的とはいえないが、思想を言説の論理性と体系性で意味づけるだけに止めず、社会のなかに生きている「共和主義」を捉える精神史的方法としての可能性をもっている。

独自性の第三は、丘の「共和主義」の特質をその語り方のレトリック論として分析した斬新さにある。丘の文章の特徴は、「諷刺」の効果を十分に心得た「逆説」の駆使にあり、それは禁圧されている「共和主義」の「合法的」伝播の方法でもあった。そのレトリックの駆使は福澤諭吉や正木ひろし等とともに特筆される点であろう。

全体として論証は緻密実証的であり、説得的な記述を心掛け、日本の共和主義研究史に新しい視点と方法を提示し、「共和主義」思想の生成を軸にした総合的な丘浅次郎像の構築への第一歩となるものである。

II 本論文の問題点

しかし本論文にも、いくつかの問題点あるいは今後の課題ともいえるべき論点がある。ま

ず第一は、「共和主義」とその基盤である「共和主義意識」とがどのように概念として区別され、連関するのかが不明確な点である。日本では「共和主義」は「天皇制」との関わりで議論されてきたが、ここで「共和主義」とは「天皇制」否定なのか、天皇を祭り上げることへの批判かなど、「天皇制」論における諸側面とどのように関わるかが詰めて議論される必要がある。

第二は、ネットワーク論について、筆者はそうした「仲よし共同体」の起源を「江戸戯作者風」気分に見出しているが、どこまで実証されているか、また丘自身と他のメンバーとの断絶と分岐がいつどのような契機で生れてくるかが重要である。それは本論文でも部分的に触れられているが、たとえば坪井正五郎の「学術人類館事件」へのコミットや戦中における人類学者の戦争協力など、人類学会関係の多くの研究者は「帝国意識」に取り込まれて行くからである。この論点は、丘たちが推進した理科教育の啓蒙が一面では合理的思考を推し進めるとともに、他面では国家的生産力の推進という大義名分と不可分という矛盾がどのように認識されていたかという論点と重なっている。

第三に丘浅次郎の思想形成史については、まだ不明確なことも多く、たとえば出身が男爵の家系であったことやエスペランティストであったことと「共和主義」がどのような関係にあったのか、また丘の「つきあい嫌い」という定評と「仲よし共同体」のネットワークはどのような関係にあったのかなど、今後究明されるべき多くの論点が残っている。

第四には、「終章」における日本における「さまざまな共和主義」という視角からの、吉野作造、羽仁五郎・正木ひろし等との比較分析も今後の課題である。

Ⅲ 総括的評価

以上のような問題点及び今後の課題は残っているが、本論文は膨大な研究史と関連文献を博捜し、明治期から戦争末期まで丘浅次郎の生涯にわたる学問と思想活動を対象に、その「共和主義」像を明示し、ひとつの新しい丘浅次郎像を提起したと評価できる。以上によって、本論文を博士本審査論文として合格と評価した。